



京都予防医学センター  
専務理事・附属診療所長  
佐藤篤彦

## ずいひつ チェンマイでの カウントダウン

これまでの海外は、学会や留学などの仕事を目的としていたが、今度の海外は、旅を目的としてチェンマイに出かけた。

チェンマイを選んだ理由は、チェンマイが北山連峰と東山連峰に囲まれた盆地に位置し、寺院が点在している京都に似た古都であること、20世紀が去り21世紀が来るという思いを深い感慨をもって海外で迎えてみたく、そして私の好物であるカレーうどんに似たタイ料理の“カオ・ソーイ”を食べたい願望から、女房を口説いて同行してもらった。

乾期のチェンマイは、底冷えする冬の京都と違って、日差しが強い(26 )が、涼しさが肌に感じられる凌ぎやすい気候であった。

タイ北部のチェンマイは、喧騒に満ちたバンコクから700kmという距離にあるせいか、2000m級の山の峰々からの流水を集めたピン川岸にある街角の古い城壁に身を置くと時空を超えた静けさに出会う。

ラン(百万)ナー(稲田)王国の都として繁栄したチェンマイの師走は、もち米の揚げ煎餅、少しにおいが残る豚の皮のから揚げ(ケー・チャー)が各店先にうず高く積まれているが、それを買い物の主婦によって崩されていく様は日本の師走の風景と変わらない。

昼食のチェンマイ風カレーそば“カオ・ソーイ”は、香辛料たっぷりのスープがスパイシーだが、フライドオニオンとココナツミルクの甘さと合わさった味に

コクがあり期待通りのもので、食べる時に香菜の塩漬け、ホムデンという小さな赤たまねぎをのせ、マナオを絞りにかけて食すると、辛、酸、甘のハーモニーが堪能できるタイ料理であった。

ホテルでのカウントダウンを大勢の外国人たちと叫び、新世紀を祝う空一杯に踊り舞う花火を眺めつつ、ハッピーニューイヤーの祝詞を投げ合った数十分後、突然、妙な静寂に見舞われた。その静寂さは、不思議な安らぎを私に与え、過ぎ去った20世紀の思い出の世界に私を誘っていた。苦しみも悲しみも、思い出のすべてが過ぎ去られていくようだった。

タイ人が慈しみを込めて「北方のバラ」と呼ぶチェンマイのカウントダウン後の静寂が、今回の旅の目的であったような気がしてきた。タイ人がよく表す“マイ・ペン・ライ(日本語で気にしない、どうってことない)”という言葉があるが、HIV陽性結核の著しい増加のタイ王朝の将来を思うと、21世紀もマイ・ペン・ライでよいのかと、静寂の中で一抹の不安が私の脳裏をかすめた。

